

## [船橋淳監督のトークから]

————— @谷中コミュニティセンター + 谷根千「記憶の蔵」 + JAZZ喫茶「映画館」

### ●避難所生活を追体験してほしい

この映画は 2011 年の4月から9か月間を第1部として、今も撮影を続けています。ちなみに騎西高校には今も 160 人あまりの方が生活されています。

映画で一番やりたかったことは、避難所の生活をそのまま描く、ということです。映画を観た方々がそこに自分も住んでいるように感じるような映画にしたかった。朝起きて弁当を食べて、そこらへんをちょっと散歩して、お昼にパンが出て、午後は買い物に出たりして、また夕食にお弁当を食べて、テレビなど観て寝る。そんな生活が毎日毎日、今も続けられています。それを映画にどっぷりつかって観ていただくことによって、避難所で日々どんなことが起こっていて、中央の政治がどんなに遠くに感じられるか。どれだけ東電の言葉が薄っぺらく感じられるかを味わってほしいと思ったんです。

9か月にわたる撮影で 300 時間カメラを回しました。11 時間までに編集しましたが、それでも劇場にかけるには長く、最終的に泣く泣く現在の 96 分までに編集しました。削ったシーンも本当は観てほしかったのですが、たとえばペットが共同生活をしているシーン。家族同様のペットを車に乗せて逃げてきて、避難所ではペットたちを1か所に集めている部屋があるんですが、ストレスで毛が抜けてしまった犬とかいました。

### ●東京の電気が福島でつくられていたと知って・・・

当初は漠然と撮り始めたのですが、結局、撮影を続ける強い動機となったのは、福島でつくられた電気はほぼ 100%関東圏に送られていて、自分が東京で毎日使っているものだった、という事実です。原発が事故を起こして、自分が避難を強いられるならまだわかるが、遠く離れた双葉の人たちが避難を強いられている、これはどういうことなのかということがひっかかった。何かそこに不平等があるなど。

この事実をどう受け止めて、これから自分はどうしたらよいのか。この答えがわかるまで、電気を消費してきた僕と、電気を生産してきた双葉の方々の対話を記録しようと思いました。この問題意識が撮影を続ける一番の原動力となっていたのです。

これは元を正せば、1960 年代に日本政府がアメリカから原発を輸入して、どこに配置するかという時に、都市部ではなく人口の少ない田舎のほうに建てようという政策を打ったのです。その裏にはもちろん、もし事故が起こったらその地方が割を食うことになるという考えがあります。もともとこれは犠牲を強いるシステムであったということなんです。

それを決めたのは国だ、国が悪いと言うことはできるんですけど、我々も犠牲を強いるシステムによりかかって電気を使っている以上、我々に責任はないと言えません。我々は原発事故の当事者である。そのことを一人でも多くの人に考えていただきたいと思っています。

「フタバから遠く離れて」というタイトルには、双葉の人たちが遠く離れた埼玉まで避難してきたという意味と、もう一つ、我々東京の人間が遠く離れた双葉の電気を使ってきたという意味を込めています。

知らないふりをするのは簡単なんですけど、このことを知ってしまった以上、もう無視はできない。原発を推進するということは、「遠く離れた人びとに避難を強いるシステムに依存するべきだ」と言っているのと同じことだと思います。

### ●原発はハイリスク・ハイリターン

原発はハイリスク・ハイリターンであることを知っておくべきです。

ハイリターンとは、東京など都市部の人間は電気をたくさん使って生産性を高めて経済発展させてきた。

立地地域では交付税をもらって、町が潤って雇用も保証されて発展する。じゃあ都市と地方はウィンウィンの関係かという、そこで隠されてきたのがハイリスクのほうです。

損害賠償の申請については、例の160ページの分厚い説明書に書いてありますが、読んでるだけで頭がクラクラしてくるようなものです。避難するときのタクシー代、バス代とか、新しく買った衣料代、医者にかかったら医療費など、細かいもろもろの説明があって、その一番下に「不動産などの財産については今後話し合う」とだけ書いてあるんです。一番高いものは後回しということです。

その後、帰宅困難地域の不動産については事故前の時価評価ということになりました。たとえば、僕の知っているじいちゃん、先祖代々から受け継いだ大きな木造家屋に住んでいました。その家を時価評価すると、120万円です。120万円で自分の人生を再スタートできますか？

事故が起きない限り、こういうことはなかなか表面化されませんが、まさしくこの映画が伝えているように、1年8か月以上、国からほったらかしにされ、賠償も値切られる、そういうリスクがあるのだということです。

### ●井戸川町長の葛藤

双葉町は避難指示が出た自治体の中で唯一県外に飛び出して、もっとも遠くへ逃げた町です。僕はそこに哲学を感じました。放射能に対する敗北を認めているなあと。日本人は敗北を認めるのが苦手な民族だと僕は思っています。戦争末期、連戦連敗だったのに、国民には連戦連勝だと言いつづけた。1度言ったことは曲げられない、今さらやめられない、というメンタリティがどこかあって、放射能に対しても、今までの安全対策とか防災訓練など、いざ事故が起こったら何の役にも立たなかったということを認められないんです。

双葉町のこの選択に興味を覚えて、とにかく行ってみようと思いました。誰の判断なんだろうと。のちのちそれが井戸川町長によるものだとわかったんですが、この興味がそもそも撮影を始めたきっかけです。

騎西高校には、最初はマスコミがテレビもラジオもほとんど全社が来ていました。50社ぐらい。井戸川町長は本質的な話になると、はぐらかしてしまうんです。「原発を推進してきたが今どう思うか？」ときかれても、はっきりした答えは得られませんでした。

町長の態度がだんだん変わってきたのは夏過ぎからです。「もう、話しますよ」と町長が僕に言ってきました。そのあたりからメディアにも国を公に批判するようになりました。

町長自身の中でずっとジレンマがあったのだと思います。今まで推進をしてきて、2011年4月には7、8号基着工の予定でした。それが全部ひっくりかえってしまった。自問自答する日々だったと推測します。最初は国や県が何とかしてくれるのではないかと思っていた。でも、被ばくの検査も賠償も進まない。時間がたつごとに、そうじゃないとひしひしと感じてきたと思います。ご本人もあとで「辛い日々だった」とおっしゃっています。映画の最後のほうで「原発誘致は失敗だった」とはっきりおっしゃっていました。これはとても時間がかかった重みのある言葉です。

### ●ふるさとに生きる権利

井戸川町長は「日本の憲法は人が人間らしく生きる権利を保障しているが、福島に関してはそれがまったく保持されていない」と訴えています。被ばくを強いられたなかで生きることはこれに反している。賠償がされないままでは新しい人生をスタートできず仮設暮らしが続いている。生きるための様々な条件を奪われていて、平等に国民生活を送っているといえるか。町長は声を大にして発言するようになりました。

被ばくのことでは、日本政府による健康リスクの線引き、ここまでは住める・住めないという線引きが、はっきり言ってまちがっています。

現在の避難の基準は、チェルノブイリの避難の基準とされた値の4倍高い基準になっています。チェルノブイリ事故直後、ICRP（国際放射線防護委員会）の圧力によって旧ソ連政府は5ミリシーベルト以上は避

難命令を出しました。つまり避難の費用は全部国が持つということです。さらに1ミリシーベルト以上は「避難の権利」を認め、自主避難する場合はそのコストを国が持ちます。

ところが、日本の今の基準は年間20ミリシーベルトです。「20ミリシーベルト以下は住め」といっているんです。チェルノブイリで起きたことから日本は何も学んでいない、もしくは被害を矮小化して、賠償額をできるだけ小さくするために、避難の基準を上げているんです。そして避難の権利は認めていません。

10月にスイスのジュネーブの国連人権理事会で、井戸川町長はこのことを世界に訴えました。家、土地、財産の保障はもちろんですが、これからもっと言語化していかなければいけないのは失われたコミュニティ、歴史、文化、代々受け継いできたものを根こそぎ奪われていることです。町長は「ふるさとに生きる権利」と名づけて、その賠償を求めています。しかし、翌日の新聞でそのことをとりあげているところはありませんでした。建物などの賠償を訴えているということしか出てこないのです。

#### ●時間軸方向で考えた保障を

政府は今、最低5年は戻れないという言い方しかしていません。騎西高校にいるじっちゃん、ばあちゃんは、5年たったら戻れると思っている方が多いんです。でも、実際には5年後、10年後の被害はどうかということを研究者などのコンセンサスを取りながら予測をたてていくということがおこなわれていない。放射線マップは詳細につくられていても、時間軸方向の被害を見積もれないんです。

日本人は自分の職責に対してとても責任感があって、自分の職分を超えないことを大事にしています。俯瞰して公益を考えようという目線を持っている人がいないんです。

僕はアメリカに住んでいた時にハリケーン・カトリーナとか911も体験しました。そういうときに被害をどう見積もるかという、国や加害者企業など、時間がたてばたつほど、それがチャージされるシステムになっています。たとえば、すっか元通りに住めるようになるまでの生活を保障する。痛みを被害者だけでなく加害者のほうにも持たせるしくみになっています。

日本では、賠償が遅れても国や東電は痛くもかゆくもないんです。これは日本が四大公害訴訟で通ってきた道です。これだけはやってはいけないとわかっていたはずのことなのに。でも、日本的な解決方法があると思います。僕は、必要と思われるだけ賠償金を先払いして、新しい生活が落ち着いたところで、双葉に戻るか土地を国が買い取るかなどの交渉をしたらどうか、と考えています。今のままでは被害者が一方的に疲弊させられていくだけです。

#### ●国民の命を守る政治家は誰か

2011年12月16日、野田首相は事故収束宣言をしました。事故の解明も終わっていないどころか、いまだに避難所生活でお弁当の毎日が続いている人びとがいて、被害の賠償さえ決まっていない状態でそれはないだろうと。このときに僕は撮影してきた記録を映画にまとめようと決意しました。

今、その日から奇しくも1年後に総選挙が予定されています。

T P P、消費税などいろいろな問題があると言われるかもしれませんが、原発の問題は、優先順位がまったく違うと思います。命の問題と経済の問題が天秤にかけられるか？ということです。脱原発というのはイデオロギーの問題ではないんですね、実は。

この選挙で脱原発を争点にしなければいけないと僕らが言っているのは、政府が我々国民の命を守ることを最優先に考えているかどうかのリトマス試験紙だからなんです。それを優先に考えているのか、賠償額を値切ろうと考えているのか。福島救済と脱原発は我々国民が人間らしく生きる権利を守る闘いでもあります。そこを共有できる人に政治を託したい、そういうことだと思います。

#### ●原発はハイリスク・ハイリターン

原発はハイリスク・ハイリターンであることを知っておくべきです。

ハイリターンとは、東京など都市部の人間は電気をたくさん使って生産性を高めて経済発展させてきた。立地地域では交付税をもらって、町が潤って雇用も保証されて発展する。じゃあ都市と地方はウィンウィンの関係かという、そこで隠されてきたのがハイリスクのほうです。

損害賠償の申請については、例の160ページの分厚い説明書に書いてありますが、読んでるだけで頭がクラクラしてくるようなものです。避難するときのタクシー代、バス代とか、新しく買った衣料代、医者にかかったら医療費など、細かいもろもろの説明があって、その一番下に「不動産などの財産については今後話し合う」とだけ書いてあるんです。一番高いものは後回しということです。

その後、帰宅困難地域の不動産については事故前の時価評価ということになりました。たとえば、僕の知っているおじいちゃんは、先祖代々から受け継いだ大きな木造家屋に住んでいました。その家を時価評価すると、120万円です。120万円で自分の人生を再スタートできますか？

事故が起きない限り、こういうことはなかなか表面化されませんが、まさしくこの映画が伝えているように、1年8か月以上、国からほったらかしにされ、賠償も値切られる、そういうリスクがあるのだということです。

#### ●井戸川町長の葛藤

双葉町は避難指示が出た自治体の中で唯一県外に飛び出して、もっとも遠くへ逃げた町です。僕はそこに哲学を感じました。放射能に対する敗北を認めているなあと。日本人は敗北を認めるのが苦手な民族だと僕は思っています。戦争末期、連戦連敗だったのに、国民には連戦連勝だと言い続けた。1度言ったことは曲げられない、そういうメンタリティがどこかあって、放射能に対しても、今までの安全対策とか防災訓練など、いざ事故が起こったら何の役にも立たなかったということが認められないんです。

双葉町のこの選択に興味を覚えて、とにかく行ってみようと思いました。誰の判断なんだろうと。のちのちそれが双葉町長によるものだとわかったんですが、それがそもそも撮影を始めたきっかけです。

騎西高校には、最初はマスコミがテレビもラジオもほとんど全社が来ていました。50社ぐらい。井戸川町長は本質的な話になると、はぐらかしてしまうんです。「原発を推進してきたが今どう思うか？」ときかれても、はっきりした答えは得られませんでした。

町長の態度がだんだん変わってきたのは夏過ぎからです。「もう、話しますよ」と町長が僕に言ってきました。そのあたりからメディアにも国を公に批判するようになりました。

町長自身の中でずっとジレンマがあったのだと思います。今まで推進をしてきて、2011年4月には7、8号基着工の予定でした。それが全部ひっくりかえってしまった。自問自答する日々だったと推測します。最初は国や県が何とかしてくれるのではないかと思っていた。でも、被ばくの検査も賠償も進まない。時間がたつごとに、そうじゃないとひしひしと感じてきたと思います。ご本人もあとで「辛い日々だった」とおっしゃっています。映画の最後のほうで「原発誘致は失敗だった」とはっきりおっしゃっていました。これはとても時間がかかった重みのある言葉です。

#### ●ふるさとに生きる権利

井戸川町長は「日本の憲法は人が人間らしく生きる権利を保障しているが、福島に関してはそれがまったく保持されていない」と訴えています。被ばくを強いられたなかで生きることはこれに反している。賠償がされないままでは新しい人生をスタートできず仮設暮らしが続いている。生きるための様々な条件を奪われていて、平等に国民生活を送っているといえるか。町長は声を大にして発言するようになりました。

被ばくのことでは、日本政府による健康リスクの線引き、ここまでは住める・住めないという線引きが、はっきり言ってまちがっています。

現在の避難の基準は、チェルノブイリの避難の基準とされた値の4倍高い基準になっています。チェルノブイリ事故直後、ICRP（国際放射線防護委員会）の圧力によって旧ソ連政府は5ミリシーベルト以上は避難命令を出しました。つまり避難の費用は全部国が持つということです。さらに1ミリシーベルト以上は「避難の権利」を認め、自主避難する場合はそのコストを国が持ちます。

ところが、日本の今の基準は年間20ミリシーベルトです。「20ミリシーベルト以下は住め」といっているんです。チェルノブイリで起きたことから日本は何も学んでいない、もしくは被害を矮小化して、賠償額をできるだけ小さくするために、避難の基準を上げているんです。そして避難の権利は認めていません。

10月にスイスのジュネーブの国連人権理事会で、井戸川町長はこのことを世界に訴えました。家、土地、財産の保障はもちろんですが、これからもっと言語化していかなければいけないのは失われたコミュニティ、歴史、文化、代々受け継いできたものを根こそぎ奪われていることです。町長は「ふるさとに生きる権利」と名づけて、その賠償を求めています。しかし、翌日の新聞でそのことをとりあげているところはありませんでした。建物などの賠償を訴えているということしか出てこないのです。

#### ●時間軸方向で考えた保障を

政府は今、最低5年は戻れないという言い方しかしていません。騎西高校にいるじっちゃん、ばあちゃんは、5年たったら戻れると思っている方が多いんです。でも、実際には5年後、10年後の被害はどうなのかということを経験者などのコンセンサスを取りながら予測をたてていくということがおこなわれていない。放射線マップは詳細につくられていても、時間軸方向の被害を見積もれないんです。

日本人は自分の職責に対してとても責任感があって、自分の職分を超えないことを大事にしています。俯瞰して公益を考えようという目線を持っている人がいないんです。

僕はアメリカに住んでいた時にハリケーン・カトリーナとか911も体験しました。そういうときに被害をどう見積もるかという、国や加害者企業など、時間がたてばたつほど、それがチャージされるシステムになっています。たとえば、すっか元通りに住めるようになるまでの生活を保障する。痛みを被害者だけでなく加害者のほうにも持たせるしくみになっています。

日本では、賠償が遅れても国や東電は痛くもかゆくもないんです。これは日本が四大公害訴訟で通ってきた道です。これだけはやってはいけないとわかっていたはずのことなのに。でも、日本的な解決方法があると思います。僕は、必要と思われるだけ賠償金を先払いして、新しい生活が落ち着いたところで、双葉に戻るか土地を国が買い取るかなどの交渉をしたらどうか、と考えています。今のままでは被害者が一方的に疲弊させられていくだけです。

#### ●国民の命を守る政治家は誰か

2011年12月16日、野田首相は事故収束宣言をしました。事故の解明も終わっていないどころか、いまだに避難所生活でお弁当の毎日が続いている人びとがいて、被害の賠償さえ決まっていない状態でそれはないだろうと。このときに僕は撮影してきた記録を映画にまとめようと決意しました。

今、その日から奇しくも1年後に総選挙が予定されています。

T P P、消費税などいろいろな問題があると言われるかもしれませんが、原発の問題は、優先順位がまったく違うと思います。命の問題と経済の問題が天秤にかけられるか？ということです。脱原発というのはイデオロギーの問題ではないんですね、実は。

この選挙で脱原発を争点にしなければいけないと僕らが言っているのは、政府が我々国民の命を守ることを最優先に考えているかどうかのリトマス試験紙だからなんです。それを優先に考えているのか、賠償額を値切ろうと考えているのか。福島救済と脱原発は我々国民が人間らしく生きる権利を守る闘いでもあります。そこを共有できる人に政治を託したい、ということだと思っています。